

大会スケジュール

1日目 5月26日(土)

9:15 受付

10:00	口頭発表 1A 記憶1	口頭発表 1B 注意	ポスター発表 1 思考・言語・情動
12:00	2F 国際交流ホール I	2F 国際交流ホール II	2F 国際交流ホール III

13:00	口頭発表 2A 言語・概念発達	口頭発表 2B 音楽・情動	ポスター発表 2 知覚・注意・認知
15:00	2F 国際交流ホール I	2F 国際交流ホール II	2F 国際交流ホール III

15:15	シンポジウム 認知心理学の可能性
17:15	1F 百周年記念ホール

17:30	招待講演 1 Lambon Ralph, M. A
18:30	1F 百周年記念ホール

19:00	懇親会 正門横 カンフォーラ
-------	--------------------------

2 日 目 5 月 27 日 (日)

9:15 受 付

9:30	口頭発表 3A 思考・推論	口頭発表 3B 運動・行為	ポスター発表 3 記憶
11:30	2F 国際交流ホール I	2F 国際交流ホール II	2F 国際交流ホール III

12:30	総会 1F 百周年記念ホール
13:00	独創賞講演 北岡明佳
14:00	1F 百周年記念ホール

14:15	招待講演 2 Rensink,R.
15:15	1F 百周年記念ホール

15:30	口頭発表 4A 記憶 2	口頭発表 4B 知覚・認知
17:30	2F 国際交流ホール I	2F 国際交流ホール II

シンポジウム

「認知心理学の可能性」

5月26日(土) 15:15-17:15

百周年記念ホール

ナイサーの古典的教科書「Cognitive Psychology」が書かれて40年。認知心理学の中で生まれ発展した研究手法や研究成果は、現在、多くの隣接分野の研究・実践に影響を及ぼし、その内容も多様性を増しています。本大会では、精神神経医学、比較行動科学、認知神経科学、社会心理学という、認知心理学と関わりの深い、4つの隣接分野で活躍されている4名のかたがたをシンポジストに、認知心理学が隣接諸科学にどのような影響を及ぼし、これまでどのような貢献をしてきたのか、研究の深化や拡がりを生み出すポテンシャルという観点から考えたとき、今後どのような可能性が期待できるのか、といった角度から、それぞれの研究領域の現状も含めて、お話いただくことにいたしました。シンポジストの先生が提示される研究例やそれらの理論的考察、実践的意義等について考えを深めることにより、認知心理学のもつ可能性について議論を深めるシンポジウムにしたいと考えております。多数の皆様方のご来場をお待ちしております。

加藤元一郎（慶応義塾大学） 精神神経医学の立場から

正高信男（京都大学霊長類研究所） 比較行動科学の立場から

乾 敏郎（京都大学大学院情報学研究科） 認知神経科学の立場から

木下富雄（国際高等研究所フェロー） 社会心理学の立場から

企画・司会 吉川左紀子（京都大学こころの未来研究センター）

独創賞 授賞式・記念講演

5月27日(日) 13:00-14:00

百周年記念ホール

日本認知心理学会は、一昨年、「独創賞」を創設しました。独創賞は、日本の研究者がおこなった独創的な認知研究を顕彰するための賞です。この賞は、「独創的な研究への注目度が高まれば、独創的な研究が更に増えるのではないか」という期待のもとに創設されました。

一昨年、第1回の受賞研究は、戸田正直氏の「アージ理論」、昨年、第2回の受賞研究は、浜田寿美男氏の「自白研究」でした。

今回は第3回になりますが、会員から推薦された複数の候補研究について、それぞれ3名ずつの専門家に独創性の評価を依頼し、提出された報告書にもとづいて、独創賞選考委員会で慎重に選考を進めた結果、次の研究を今回の受賞研究とすることに決まりました。

「新錯視群」 (立命館大学文学部 教授 北岡明佳)

この研究は、視覚情報処理プロセスについての理論的な考察にもとづいて、数々の新しい錯視を世に送り出したという研究です。理論的な考察もさることながら、実際に錯視図形を作り出すプロセスにも、高い独創性が発揮されたのではないかと推察されます。北岡氏の錯視図形は、既に多くの場所で人びとの目を驚かせ、楽しませています。

授賞式に続く記念講演では、北岡氏ご自身がこの研究についてお話しくださることになっています。

賞状授与： 太田信夫 (日本認知心理学会理事長)

記念講演： 北岡明佳 (立命館大学文学部)

「錯視の認知心理学」

司 会： 高野陽太郎 (日本認知心理学会独創賞選考委員会委員長)

招待講演 1 (京都大学こころの未来研究センター共催)

The neural basis of semantic cognition:

A cognitive neuroscience approach

Matthew A. Lambon Ralph (University of Manchester, UK)

5月26日(土) 17:30-18:30

百周年記念ホール

司会 齊藤 智 (京都大学)

By using a novel convergence of different methods - including neuropsychology, repetitive transcranial magnetic stimulation (rTMS), functional and structural neuroimaging and computational modelling - it is possible to build up a picture of which brain regions contribute to semantic cognition and how they do this. Our recent research suggests that semantic cognition is made up of two interacting components: semantic representations and semantic control. Patients with bilateral damage to the anterior temporal lobes - particularly those with semantic dementia - indicate that these regions are critical in the formation of amodal concepts. When these are degraded then the patients exhibit semantic impairment across all modalities in both receptive and expressive tasks. rTMS applied to the ATL in neurologically-normal participants also shows a specific effect on semantic tasks.

Some patients with aphasia can also demonstrate multimodal semantic impairment (including those with transcortical sensory aphasia), following left prefrontal or temporoparietal infarction. A direct comparison with semantic dementia indicates that the nature of their semantic impairment is qualitatively different. Rather than a degradation of the semantic representations themselves, these patients' impairment results from poor semantic control, making them unable to shape the underlying representations in order to produce context-appropriate semantic behaviour.

招待講演 2 (京都大学こころの未来研究センター共催)

Attention, Memory, and Scene Perception

Ronald A. Rensink (University of British Columbia, Canada)

5月27日(日) 14:15-15:15

百周年記念ホール

司会 齋木 潤 (京都大学)

Although it appears to us that we always see everything in front of us, recent work in visual perception has shown that this is not true. For example, it has been found that observers have great difficulty noticing changes that occur during a brief interruption or eye movement, even if the changes are large and the observer expects them. This phenomenon of "change blindness" has motivated much investigation over the past decade into the issue of how much of a scene is remembered, what kinds of memory systems are involved, and what role is played by visual attention. An overview will be presented of the main results obtained so far, along with some of the current controversies.

サテライトワークショップ

(京都大学こころの未来研究センター共催)

本大会のサテライト企画として、海外招待講演者のお二人をコメンテーターに迎えた2つのワークショップを開催いたします。大学院生等の若手研究者に、英語での口頭発表とディスカッションの機会を提供することが目的です。多数の方々のご参加をお待ちしております。

5月28日(月) 9:00-12:00

京都大学 大学院人間・環境学研究科棟 地階 B23-A/B 講義室

(京都大学吉田南キャンパス内の大学院人間・環境学研究科棟の東側入り口から地階へ)

<http://www.h.kyoto-u.ac.jp/jinkan/top/map.html>

<ワークショップ1, 日本心理学会注意と認知研究会共催>

テーマ：視覚認知

コメンテーター：Ronald A Rensink (University of British Columbia, Canada)

世話人：齋木 潤 (京都大学大学院人間・環境学研究科)

<ワークショップ2>

テーマ：記憶と言語

コメンテーター：Matthew Lambon Ralph (University of Manchester, UK)

世話人：齊藤 智 (京都大学大学院教育学研究科)

実施形態：発表とディスカッションはすべて英語で行われます。各発表者の発表時間はおよそ30分(10分程度のディスカッションを含む)を予定していますが、発表者の数によっては若干の変更があるかもしれません。